

現代の女流文学

編集 女流文学者会

5

宇野千代

森万紀子

高橋たか子

原田康子

池田みち子

中里恒子

川上喜久子

幸田文

毎日新聞社

編集 女流文学者会

5

宇野千代

森万紀子

高橋たか子

原田康子

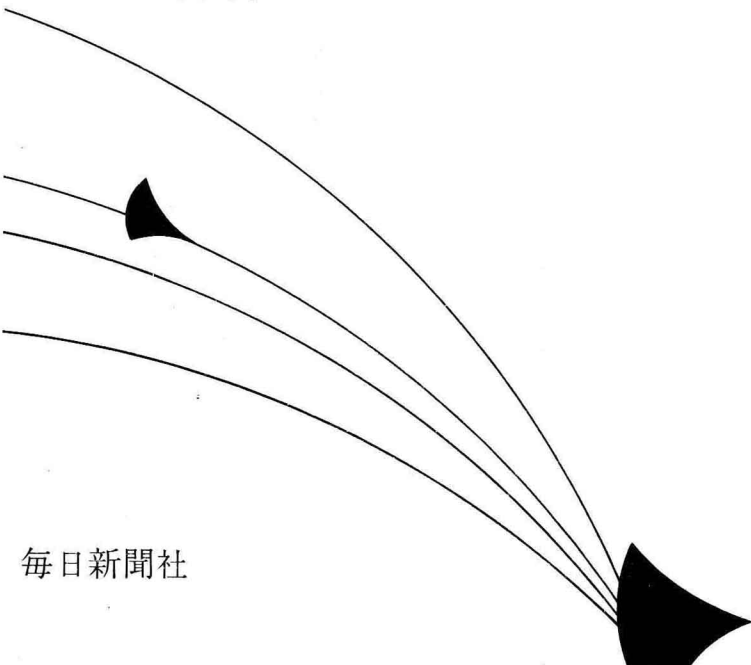
池田みち子

中里恒子

川上喜久子

幸田文

毎日新聞社

An abstract graphic design featuring several thin, curved lines that originate from a large, solid black, fan-like shape at the bottom right and extend towards the left. A smaller, solid black, teardrop-shaped element is positioned on one of these lines, approximately one-third of the way from the left edge of the page.

現代の女流文学 第五卷

定価 一二〇〇円

昭和五十年一月十日 印刷
昭和五十年一月二十日 発行

編集 女流文学者会

編集 円地文子
委員 佐多稲子

編集人 桑原隆次郎

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷 大口製本

〈検印省略〉

現代の女流文学 5

目次

宇野千代

おはん
5

森万紀子

密約
51

高橋たか子

相似形
83

原田康子

サビタの記憶
109

池田みち子

傍観者
123

中里恒子

鎖 149

川上喜久子

淡彩 燕 201 185

幸田文

おとうと 213

中村佐喜子

女流文学者の会のあゆみ 5 337

秋山駿

解説
スタイルの成
立させるもの 341

裝
幀
安
東
澄

お
は
ん

宇
野
千
代

宇野 千代

明治三〇（一八九七）・一一・二八。山口に生まれる。岩国高女卒。小学校教師、渡鮮などを経て大正六年、上京。同九年、藤村忠と結婚、札幌に居住。翌年、「脂粉の顔」が「時事新報」の懸賞小説で一等当選。上京して作家生活に入り、離婚。同十二年、尾崎士郎と同棲。昭和二年、伊豆に滞在、川端康成らを知る。同五年、「報知新聞」に最初の長編「罌粟はなぜ紅い」を連載。東郷青児と同棲。「色ざんげ」（昭八―一〇）、「別れも愉し」（昭一〇）などを発表。同十四年、北原武夫と結婚。同十七年、「人形師天狗屋久吉」を発表。戦後、スタイル社を再興、「文体」を復刊する。同三十二年、十年の歳月をかけて「おはん」を完結、第一〇回野間文芸賞および第九回女流文学者賞を受賞。同三十九年、離婚。同四五年、「幸福」により第一〇回女流文学賞を受ける。同四七年、多年にわたる作家としての業績に対して、第二八回芸術院賞を受ける。

その他著書に、『幸福』（大一三）、『白い家と罪』（大一四）、『新選宇野千代集』（昭四）、『オペラ館・サクラ館』（昭九）、『女の日記』（昭三五）、『刺す』（昭四一）、『風の音』（昭四四）、『貞潔』（昭四五）、『或る一人の女の話』、『私の文学的回想』（昭四七）などがある。

『よう訊いてくださりました。私はもと、河原町の加納屋と申す紺屋の倅でござります。生れた家はどうの昔に逼迫してしまい、いまではこのような人の家の軒さき借りて小商いの古手屋、もう何の屈托もない身の上でござりますのに、何を好んでいらぬ苦勞するかとおもいますと、わが身の阿呆がおかしゅうてなりませぬ。』

へい、あの女は、実は私の女房ではござりませぬ。いまから七年ほど前に、生れてはじめて馴染みました町の芸者でござります。私より一つ齡上の卅三、名前はおかよと申します。あなたさまもご存じの、半月庵の抱えであつたのでござりますが、いまでは自分で鍛冶屋町の裏手に細い家持つて、ほんの一人か二人の女衆をおいたりして、芸者屋をいたしております。私はその女の家に寝とまりして、ここへは屋食の弁当もつて通うているのでござります。

古手屋とは名ばかり、お客さま相手に茶をたてたり、すきな花を生けたりしてますのでござりますが、収入というた

ら、わが身ひとりの小遣錢にも事かかんらんような、まア言うたら女に食わしてもろうてる、しがない男でござります。

あれは去年の夏、盆も間近かの或る晩のことでござりました。

町の寄合いくずれで、よそのお人と二三人あの臥竜橋の橋の上でええ心持になつて風にふかれていたのでござります。すると誰やら、白い浴衣きた女がすうっと私のすぐ傍をすりよつて通るのでござります。この広い橋の上をあなに近うに人の傍を通らいでもと、そう思うて顔みますと、別れた女房のおはんでござります。思わずあと追いそうになりながら、お人の手前もござりますすけに、わざとに間おいて急いで警察の横手までいきますと、あとから私の来るのが分つたのでござりましょう、くらい板塀のところまで待つておりました。「おはんか。かわりないか。久しいかったなア。」と私は申しました。

あのあたりはちょうど藪堤の蔭になっておりますので、屋でも淋しいようなところでござります。川風が絶え間なしにさあアと藪の上をふきぬけてきましてなア、そのたんびに川向うの糸くり工場から女衆のうとうてる唄が手にとるようにな聞えてくるのでござります。

おはんは白い浴衣きて、見覚えのある手織縞の帯をしめておりました。どこというて男の心ひくような女ではござりませねど、いつでも髪の毛のねつとりと汗かいていますような、

顔の肌理の細いのが取柄でござりましたが、その板塀にはりつくような恰好して横むいてるのでござります。「何やて？ 子供もたっしややて？」と私はたみかけて申しました。「へえ、この春から、もう学校へ行きよります。」やつと口の中で申すのでござります。「いつやらお前にあいに行て、そや、子供の顔も見たいと思うたのやったけれど、剣もほろろにお母はんに突きだされた。それ俺の方が、何ぼう虫のええこと考えとるかわかんけど。」と、やくだいもないことをぼそぼそというてます中に、もう恋しゅうてならん女と無理無体な仲せかれてでもおりますような、おかしげな心持になったのでござります。

この女房のおはんとは、七年前あのおかよのことがもとで別れたのでござります。私は女の家へ行てしまい、おはんは新門前の親の家へ引きとられ、それはこういう狭い町の中のことでござりますに、あおうと思えば何ぼでもあいそうなものでござりますのに、もう久しいこと出あいもせなんだのでござります。

へい、おはんが子供を生みましたのは親の家へ往てからでござります。男の子で、名前は悟と申します。ほんに小説みたよな話でござりますが、二人いっしょにおります中は、もうながい間子供がほしいほしいというてまして、お大師さまに願かけたり、易者に見てもろうたりしてたのでござります。それでいよいよ別れんならんというときになって、気がついてみたら子供が宿っていたのでござります。

ほんに一しょにいます中におぎやアと生れておりましたら、私も迷いはせなんだやろと思うのでござりますが、そんでいて、こういうときの男の心いうたら、畜生みたようなものでござりますわなア。七年ぶりにおうた女房の口から、現在血をわけたわが子が学校へいきよるときかされましても、へえ、そうか、知らん間に大きゅうなりよったなア、とは思いましたれど、それでどうぞこうぞしてやりたいとは夢にも思わなんだのでござります。

子供のことも何よりも、私にはいまその眼の前にたっているおはんの心の中が気にかかってなりませぬ。それアもう、ほかに女をこしらえて、罪咎もない女房を塵芥のようにすてしもうたのでござりますに、おはんのお袋さまには勿論のこと、世間のお人にどう思われておりましようとも不足には思いませぬ。それアもう、覚悟の上でござりますけれど、ただ、いまそこにいます女房のおはんには、どうでも悪うは思われともない。あの男はいまよその女と一しょにいてるけど、それや、よんどしようむないことがあつてのことやろ。しんから薄情な心があつてのことではないやろ、とそう思うてもらいたいのでござります。

「なア、あのな、大名小路の角に吉田屋で花屋があつたやろ、あそこの店かりて商売してるのや。朝早うはおらんけど、昼すぎやったら、たいがい往てる。裏のおぼはんにもよう話しておくけに、一ぺんあいに来てんか。」とあとさきの考えものう、いうてしもうたのでござります。

それやもう、そのようなこというて女の気をひいたり、早ういうたら、もう一ぺんおはんと擦（こ）もどして、もとの夫婦になりたいと思うたりしてたのではござりませぬ。ただその一ときの間でも、おはんの心をしずめたい、恨まれていともない、とそう思うていたまでのことではござります。

ほんに人の心ほど浅（あ）墓（はか）なものはござりませぬ。いうたらほんのその場きりの、阿呆（あほう）なてんごうでござりますのに、「分ったな」と私はおはんの肩を押すようにして低い声して申しました。「誰（た）やら向うからきよる。早う行き、」と申しますと、おはんははじめて顔あげて何やらものいたそうな眼をしてちらっと私をみましたが、それなり、あとも見んと馳（は）けていってしまうのでござります。

そのおはんの白い浴衣きた後姿が藪（やぶ）堤（づ）の一本道をずうっと向うの方へだんだんと小（こ）そうなつて、とうとう曲尺（せき）町の露（ろ）路（ろ）の方へ見えんようになっていってしまうまで、私はそこになつていたのでござります。

あと追いかけていこか、いやいかなとこ、とその間中、迷うていたのでござりますが、まアいうたら私の、これが心の迷いのはじまりでござりました。

二

それからしばらくの間、私は何とのおはんのあいにくるのを心待ちにしていたのでござります。夏の祇園（ぎん）祭（まつり）もすん

で、秋（あき）の恵比寿（えびす）さまも間近（まぢか）いと言いますのに、おはんのやつてきそうな気配（きはい）はござりませぬ。私は相（あ）かわらず大名小路（だんなみせ）の outlet（で）へ通うていたのでござりますが、晩（ばん）方（か）、店の暖簾（のれん）をおろして、さて一服（いつぷく）と煙草（たばこ）をすいながら往来（わらい）の人通りをぼんやりと眺（なが）めてますと、わが身（み）の上（うへ）の安穩（あんゑん）なのが、なにやら不思議に思われるのでござります。「おはん、ではお願い申しますで、」というて、いつものように裏手（うらで）の家へ声をかけ店の鍵（かぎ）を預けると、そわそわとわが家（いへ）へもどるのでござります。が、ちょうど日の暮（くれ）れ方（か）で、鍛冶屋（かじや）町のあたりは一日（いちにち）の中（なか）で一（い）ばん活気（かつき）のあるときでござります。

お茶屋（ちや）へよばれていく芸者（げいしや）たちの、わが手に褌（ふんどし）とつて歩いていくのんもあり、人力（じんりき）に乗（の）つていくのんもあり、私はその灯（とう）のついた色町（いろまち）の軒（のき）さきを、人目（ひとめ）をはばかるようにして小走（こそう）りに走（は）つてもどるのでござりますが、わが家の格子（くさぎ）をあけるかあけん間に、奥（おく）からおかよの痾（か）高い声（こゑ）がして、「あなたはんかいな？」といいながら走（は）つてでてくるのでござります。

玄関（げんかん）と茶（ち）の間（ま）に、形（かたち）ばかりの屏風（びんぶ）をたてて、その蔭（かげ）に晩飯（ばんはん）の膳（ぜん）がそろえてござります。膳（ぜん）の上（うへ）にはおきまりの酒（さけ）も一本（いっぴん）つけてござります。

女（おんな）どもはたいがい出（で）たあとで、おかよにとつては、やつといま手（て）があいたというときでござりますので、髪（かみ）もひつくくるように髷（まげ）つめて、浅顰（あせ）顔（か）に白粉（おしろ）もつけず、わざとに年量（としりょう）な粧（け）りをするのが癖（くせ）でござりましたが、それでもしゅんと着（き）がえはすましておりますた。

「こうして差しむかいで飯くうて、お前、なんともないかいな。ひとの女房のけて一しよになったのやけに、ときには済まんと思うこともあるやろ、」とある晩のこと私は、おかよにきいたことがござります。

半分は酒の機嫌もござりましたが、まアいうたら、わが心ひとつにつつんでおくのが切のうて、思わず口にてたのでござります。するとおかよは、「何でもない。暇とって往んだ人が損したのや、」と、しん底、何でもないことのようにいうのでござります。おかよの心にししたら、まア、これほどまでに何でもないことなかいなと思いますと、横着な女やと呆れるよりも、なにやら私まで気楽な心持になりましてなア、忘れるともなく半月ばかりすぎましたある昼すぎ、ちょうど私はお客さまのお届けもの持って、そこまで行てこうと、一足でかけたときでござります。

店さきにおいてありますあの石燈籠の蔭におはんが立っておりました。肩掛で顔かくすようにしてそこにいてましたが、私の姿を見ると、逃げるような恰好して行てしまいそうにするのでござります。

私はそのあとから、「おはん、おはんやないか、」とよびました。

すると、すくまったように立ちどまって、「へい。」と消えるような声でこたえるのでござります。あとでききますと、おはんは幾度もこの店の前まできたけれども、おもての明るい中はどうしてもはいってこれなんだ。それで日の暮れる

のをまっけてから、思いきって鍛冶屋町の家の前までいき、あの暗い格子戸の前をいったり来たりしたことも二度や三度ではないというのでござります。

私は「早うはいり、」とおこったような声していうてから、急いで裏手の家へいきました。

「おはん、いまそこに女房のおはんがきてます。すんませんけど、ちょっとここ貸してもらわれませんやろか、」

「へえ、よろし、」とおはんは座蒲団をつき出すようにそこへおいて、急いで部屋を出ていきました。おのれの恥をあかすようで、それまでにはおはんのことなどわれから打ちあけて話したことはござりませなんだけれど、まア私の狼狽（ろうた）ようでそれと察してくれたのでござりましょう、おはんのそこにおいてます間、私のかわりに店番までしてくれましたのでござります。私はおはんをつれてその座敷へ上りました。

町中の家のことでござりますので、部屋の中は昼でも目の目がみえず、おや、と思うほどに暗うござります。まア、その家の中の暗さでやっとう心が落ちついたのやろと思います。おはんはガラス障子の傍（わき）にすりよって、おずおずと坐っております。

「ようあいになってくれたなア。ここやったら誰もやってくるものはない。こなたなというて悪いかしらんけど、このさきの寺の境内ぬけたら、悟の学校もすぐやぜ。なア、これからもときどきあいになってもらえるやろな？」と言いましても、「へい、」と答えるきりでござります。

片手を半纏の襟の下へ入れたまま、こう下むいてるときの様子といい、ほうっと肩で息して、それからゆっくりとものいうときの癖といい、もう七年前とそっくり同じでござります。

うす暗がりの中に、そのおはんの顔のぼうっと白う浮いてるのを見えますと、七年前、あの河原町の昔の家で、泣いて別れたときのことが思いだされます。家のそこには、はや迎えの人力がきているときいて、暗い納戸の簾の蔭で、泣きの涙で別れたのでござります。

へい、それアもう、飽いて別れたというのではござりませぬ。おかよという女ができたからには、いますぐというては離れられぬけれど、その中には俺も眼が覚めるけに、待ちにくいことやろけど、まア、ちつとの間だけ待っていてくれと、まア、そのようなことというて往なしたのでござります。おはんの貞節に対しまして、このようなこといえた義理ではござりませぬのに、魔のさしているときというものは、何をいうやら分ったものではござりませぬ。

ほんにこうして、いまの眼の前におはんの姿をみますと、ながい間、苦勞かけてすまんだなアと言うのさえ気がひけるような心持でござります。「そや、うまい菓子を買うてあった。茶アいれてご馳走しよう」といいながら、そこにあった茶盆の茶筒とろうと手のばしたのと、おはんが茶碗とろうと手あげたのとが、はっとあたりました。「おはん」というて私は、思わずその手をとりました。

ひい、というような声あげたと思いますと、その細い、糸みたようなおはんの眼がつりあがつて、きつと顔から血の気がひきました。「離して、離してつかさんせ、」と身悶えして、息もとまるような声して申しました。ほんにわが心ながら、何をする気であつたのやら合点がいきませぬ。

「いやか、こなたな男は、しん底愛憎がつきたか、」というてます中に、まアあれが男の出来心と申すものでござりましようか。ついさがたまで、も一度おはんの体に指ふれようなぞとは夢にも思うてはおりませなんだのに、わが身も女の身の上も、もうめちやくちやに谷底へつきおとしてしまいたいというような、阿呆な心になったのでござります。

ほんに七年というながい間、身を堅く守ってきたおはんにとりましては、それはまア、どのようなことであつたかというとも、あとになつて分つたことでござります。

おはんはながい間その屏風の蔭で慄えておりました。「こないこととして、また、あんたはんの家庭をめぐ（こわすの意）かと思うと、それが恐しゅうて、」ととぎれとぎれにいいながら、はらはらと泣いているのでござります。

「何いうてる。お前と俺とは子まででける仲やないか。今さら恐しいて、何のことがあるかい？」と私はわざと声を荒うして申しました。そのようなこというて、それが何の役に立つものか私にも分りませぬ。

「そやないか。人は何というてようと、お前は俺の女房や。俺はその氣でいる。」と私は申しました。へい。私はそう申

しました。罪深いこというてると思えば思うほど、なおいうてやりたいのでござります。昼間とも分らんような暗い家中でござりますので、おはんのそのぼってりとした体を抱いてます中に、なおのこと愚かな心がつのりましてなア、もう身も心もみくちやに打ちくだいてやりたいと思うばかりでござりました。

おはんが往にましたのは、まだ表は日のある中でござりました。挨拶もようせず、小腰をかがめて、軒したに身をかくすようにして行てしもうたのでござりますが、しばらくのあいだ私は、もうぼんやりと呆けたようになって、その上り端に腰かけてたのでござります。ああ、俺は何してのけたというのや、と思いますすと、夢みるような心持でござります。

するとそこへ、「ああ、もう往になさったのやな、」というて、この家のおはんがもどつてきました。そして私の耳に口よせて、

「ついいまがた、おかよ姐さんが見えましたぞ。うちの人はおりませんかいいうて、これ、これおいていかしやった、」というではござりませんか。見るそれは、細い箱に、なにやら茶うけの摘み物入れた包みでござります。聞さえあると何かこさえては届けてよこすのがおかよのくせでござりましたが、今日はそれを自分で持ってきたときいて、私はさあアと背中が寒うなったのでござります。

いま一とき、おはんの出ていくのが早かったら、ついその軒したでばったりとおうたであらうと思いますすと、その一

ときの間の違いが仏のお慈悲でもあったかと、思わずぎよつといたしました。

いまから申せば愚痴になりますけど、なぜにあのとき、あのぞつと鳥肌たったようなこわさ恐しさが、どうしてもっと身にしみてはいなかったのやろ、と恨めしくおもいますのも、阿呆な男の身勝手でござります。

三

おはんはそのことがござりましてから、もう十日もおかずに、しげしげとやってくるようになりました。

「いま、お母はんが風呂もらいに行かした間にきまして。ほんに、親にも嘘いうたりしてなア、」というて、袂を口にあってながら笑うたりするかと思ひますと、またときには、「誰にははかるものもない、晴れて夫婦であつたものが、人にかくれて、こうして嬉々たよにせんならん。」というて嘆いたりするのでござります。

そうかと思ひますとまた、「なんは親が迎えにきてても往なんなら宜かった。一たん嫁にきて、どななことがあつたとしても、往んだのがわたしかわるかった。」というたり、また別のときにはあのおかよのことを、「ほんにあの女いうたら、浮気なお人やけに、じきに飽いて退かはるやろと、そう思うて待つてたに、」というてみたり、それはもうくるたんに、猫の目みたよに機嫌がかわるのでござります。話する

ことも、口軽するというほどではござりませぬ、しゃんしゃんときさくにいうてのけたりしましてなア、それアもう、人目を忍んであいにくるのでござりますけに、言いたいと思うことは山ほどござりましようけれど、これがあのおはんか、人にも問われても、ろくに返答もでけんような穩当なあのおはんかと思ひますと、別人のようでござります。

まアいうたら、そのむら気なおはんが、私にはなんとも哀れに思われてきましてなア。秋から冬と日がたつにつれて、離しともない心がつのつてまいりました。店の商いも手につかず、一日炬燵にむきおうて、もういつまでもの言わんとじつとしていたこともござります。よそに女をこしらえて、一旦いなした女房と、また擦もどして乳繰りおうてる、阿呆な男やといわれまして、なんの返答もござりませぬ。

へい、子供のことでござりますか。子供の悟のことにつきましては、わが心ながら私はまアという氣であつたやら合点がまいりませぬ。

そりや、こなたごたごたの中に生れた子でござりますけに、父親の身としましては、哀れはかけにやならん筈でござります。可哀そうに、阿呆な親もつて苦勞してるとそう思わにやならん筈でござりますのに、あのはじめて、臥竜橋の橋の上でおはんにおうたあのと時から、ただもう、眼の前にいますおはんのことにばかり心がとられまして、子供のことといひますと、ただ話する合間に、そや、あの子だないしてやる、思ひ出すのもたまさかでござりました。

ひよんなこと申すようでござりますけれど、おはんとたびたびおうてます間にも、ただおはんの心つなぎたいばかりに、なにやら子供子供というてみた覚えはござりますけれど、まアそれもどれほどの考えがござりましたやら。子供に父親のこと訊かれて、なんというてある？ とおはんにたずねましたときにも、「へえ、遠いところへ旅してはる、というてきましてござります。」というてましたをええことに、もうとんと触らぬつもりでいたのでござります。

いうてみれば、女二人の間にはさまれて身のおきどころもない男が、まアどう、子供の行末を考えてやったりするものでござりましよう。

へい、さようでござります。寺の裏手をぬけて一二町もいきますと、もうすぐそこが学校でござりますので、風の具合で退けどきの鐘と一しよにわやわやと子供たちの立騒いで戻ってくる声が、手にとるように聞えて来ることがござります。そなたときにも、そや、あの声の中に子供の悟もいよるのや、とは思ひませいで、ひよつとあの中に、おはんが子供つれにいたりして、戻りにここへ寄りませまいかと、そう思つて胸騒ぎしたりするのでござります。

そなた薄情な心でいたたものが、まアようも、こうして人並の親心もつて泣いたり笑うたりすると思ひますと、わが心ながらおかしゅうてなりませぬ。

へい、ところが、或る日のことでござりました。もう暮の間近うござりましたが、店一ぱいにほかほかと日があたつ

て、その暖簾の下、細い石ころの影までべったりと地面におちてましてな、もう逆上せるようなぬくとい日のござりしました。

「おっさん、」とそういうて、その暖簾のあわいから、誰やら稚い子供がひょっこりと顔出したと思いますと、

「おうち、ゴム毬ないのん？」と申すのでござります。学校の裏手のことでござりますすけに、朝晩そこを通りしなに、何や彼やいうてくる子供はござります。

私はなんの気ものう、その子供の、ま新しい帽子かぶったまま、なにやら眩しそうに細い眼して、にっと笑うてるあどけない顔見ながら、

「毬はないなア、」といいますと、

「ないのん？ あこの古手屋へ行たら何でもあるいうてたけどなア、」というて、ちよっとの間、思いきりわるう、はにかむような顔してたと思いますと、そのまゝ、一さんに駆けついてしまいました。はっと思うて私はそこにあった草履を突っかけました。

「坊！ 坊！」と呼びながらあと追いかけて出てみたのでござりますが、もうそのときには、あの寺の石畳の横手にある、大きな銀杏の樹の向うに見えなくなつたのござります。

私はしばらくの間、よう陽があたつて、落葉の一ぱいおちてる道に、ぼんやりと立っておりまして。一体まアなににして、あの見もしらぬ子供のあと追うて駆け出てきたのやら分りませぬ。

短い紺の着物きて、ま新しい、真鍮の徽章のびかびか光つた帽子かぶつて、あの小さな子供のどこが、よその子供と違つていたというのでござりましょう。私には分りませぬ。いうてみればただの学校もどりの子供の一人が、もの買いに寄つたというて、まアこの私の、早鐘みたよな胸の動悸は何ごとでござりましょうぞ。

その日の日暮れがた、亥の子の団子もつてきたというて、おはんがひょっこりまいりました。話そうか話すまいかと迷つた末、その話をいたしますと、おはんは魂も消えるほどに吃驚して、あの子に違ひない。けさ、毬買うのやいうて、針箱の抽出あけて銭もつてはいたけれど、まさかここへこようとは、というてはぼろぼろと泣いてるのでござります。

ではおはんも何にも知らなんだのかと思いますと、ここがわが親のいてる店とも知らずにもの買いにきたあの子の哀れさ。神仏のこと申すは何でござりますが、これも何かのお導きかと思うさえ恐しい心持でござりました。

その翌の日から私はおはんには内緒で学校の前にいてました。あなたさまもご存じのように、学校から新門前の方へもどりますには、この店の方角とはまるで道が違います。あそここの薬屋と唐津屋とのあわいに大きな椋の樹がござりますやろ、あの樹の後にかくれてますと、向いの黍畑からびゅうつと寒い風が吹いてきましてなア、黍の枯れ葉やら埃やらが一べんに頬げたにまいかかつて、もう眼も上げられんようでござりましたが、ひょんなことに、それが何ともないので